初期アッバース朝のカーディーナー職

医王秀行^{*}

ABSTRACT Hideyuki Io, *The qāḍīs in the Early ‘Abbāsīd Period*: Under the ‘Abbāsīd dynasty, qāḍīs in Kūfa differed from those in Medina in their origin, personal connections and scholastic tendencies. In Kūfa, the influence of Ibrāhīm Nakha‘ī, Ibn Abī Laylā and Abū Ḥanīfa was strong, and their relatives and disciples assumed the post of qāḍīs. There were political strifes behind the appointment and dismissal of qāḍīs. Sharīk became a qāḍī after Ibn Abī Laylā who was cooperative with the government, but he lost his post due to the persecution of unorthodoxy in the reign of al-Mahdī. After Abū Yūsuf assumed the post of a qāḍī al-quḍāt, many disciples of Abū Ḥanīfa became qāḍīs in Kūfa in the days of Barmakid and al-Ma’mūn. Liberal tendencies in Iraq in those days appear to have been reflected in the views of qāḍīs and lawyers of Kūfa.

This tendency and pro-Shī‘ite trends in Kūfa came into conflict with the qāḍīs and lawyers in Medina. Among the qāḍīs of Medina there were few scholars who studied law and Ḥadīth, but people of the Bakr and ‘Umar families, who were descendents of Abū Bakr and ‘Umar condemned by the Shī‘ites held many posts of qāḍīs in Medina. It may be said that they were able to manage legal and administrative affairs in the Holy Place not because of their learning but because of their authority which they derived from being descendents of powerful families.

I. はじめに

カーディーナーとは言うまでもなくイスラム法にのっとって民事・刑事の多領域にわたる問題について裁決を下す司法官のことである。アッバース朝(132/749-656/1258)初期の時代は4法学派の学祖アブー・ハニーファ Abū Ḥanīfa (d. 150/767), マーリク・ブン・アナス Mālik b. Anas (d. 179/795), シャーフィイ

* 在チュニジア日本大使館専門調査員

ー Shāfi'ī (d. 204/820), イブン・ハンバル Ibn Ḥanbal (d. 241/855) が活躍した時期でもあり、当時のカーディーの人脈、政治的活動、職務内容を明らかにすることは、形成期にあった法学派の発展過程、当時のアッバース朝の民衆統治理念、カーディーの実際の裁決におけるイスラム法理論の適用状況を知る上でも必要なことであると思われる。

すでにバクダードのカーディーについては L. Massignon が⁽¹⁾、バスラについては Ch. Pellat が⁽²⁾そのリストを挙げているが、D. Sourdel は⁽³⁾当時のカーディーについてもっとも詳しい情報を伝えるワキーウ Wakī' をもとに、Ch. Pellat の⁽⁴⁾リストを訂正した。G. H. L. Juynboll はムタワツキル (在位232/847-247/861) 時代までの各地のカーディーたちの学問傾向を、特にハディース関係の史料を用いて分析した。しかしながら各地域のカーディーの任命に際してはどのようなウラマーの人脈が背景にあったのか、それによって各カーディーはいかなる政治的態度をとったかについては詳しい研究がなされてこなかったと言える。本稿ではこの点についてイスラム法学の中心地であったクーファ、メディナのカーディーを中心に述べていくことにしたい。

文中で使用した史料と略記号は以下の通りである。

W: Wakī', *Akhbār al-Qudāt*, ed. 'A. 'A. al-Marāghī, Cairo, 1947-1950.

Kha: Khalifa b. Khayyāt, *Ta'rikh*, ed. A. Ḍ. al-'Umarī, Riyāḍ, 1985.

Ṭ: al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wal-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1879-1901.

S: Ibn Sa'd, *al-Ṭabaqāt al-Kubrā*, 9 Vols, Beirut, 1957-1968.

Q: Ibn Qutayba, *al-Ma'ārif*, ed. Th. 'Ukāsha, Cairo, 1981.

B: Khaṭīb al-Baghdādī, *Ta'rikh Baghdād*, 14 Vols, Cairo, 1931.

Y: Yāqūt, *Kitāb Irshād al-Arib ilā Ma'rifat al-Adīb*, 7 Vols, ed. D. S. Margoliouth, Leiden, 1907-27.

Kh: Ibn Khallikān, *Kitāb Wafayāt al-A'yān wa-Anbā' Abnā' al-Zamān*, tr. M. de Slane: *Biographical Dictionary*, 4 Vols, Beirut, 1970.

N: Ibn al-Nadīm, *Kitāb al-Fihrist*, tr. B. Dodge: *The Fihrist of al-Nadīm*, 2 Vols, New York, 1970.

Ḥ: Ibn Ḥazm, *Jamharat Ansāb al-'Arab*, ed. 'A. Hārūn, Beirut, 1962.

A: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Tahdhīb al-Tahdhīb* 11 Vols, Beirut, 1971.

K: al-Kindī, *Kitāb Tasmīya Wulāt Miṣr*, ed. R. Guest, Leiden-London, 1912.

Az: al-Azdī, *Ta'rikh al-Mawṣil*, ed. 'A. Ḥabība, Cairo, 1967.

Bl: Balkhī, *Faḍā'il-i Balkh*, ed. 'A. Ḥ. Ḥabībī, Tehran, 1350/1972.

'I: Ibn 'Inaba, *'Umdat al-Ṭālib fī Ansāb Āl Abī Ṭālib*, Beirut. n. d.

Iṣ: al-Iṣfahānī, *Maqātil al-Ṭālibīyīn*, ed. A. Ṣaqr, Cairo, 1949.

II. クーフアのカーディー職

132/750年のアッバース朝の成立後、最初のカーディーはイブン・アビー・ライラー (d. 148/765) であり、彼をクーフアのカーディーに任命したのは初代のクーフア総督イーサー 'Īsā b. Mūsā であった。

彼は、ウマイヤ朝末期、カリフ・ヒシャーム治世の122/740年にもカーディーに任命されているが、⁽⁵⁾この際に彼を任命したのはイラク総督のユースフ Yūsuf b. 'Umar であった。ウマイヤ朝においては、カーディーは総督によって任命されていたが、その慣習が建国直後のアッバース朝においても受け継がれており、カリフが直接カーディーの任命に関わるようになるのは2代カリフ、マンスール (在位136/754-158/775) の治世からである。⁽⁶⁾ミスル (エジプト) にあっては、155/771-772年のアブド・アッラーフ 'Abd Allāh b. Lahī'a がカリフによって任命された最初のカーディーとされている (K 368)。北アラブはサキーフ族のイラク総督ユースフがイブン・アビー・ライラーを接見するにあたって問題としたのはその出身部族であり、南アラブの中でもアンサーリーに属す彼の出自は総督にとって満足のいくものであった。彼はカーディー職就任を承諾するにあたって扶養家族があることを動機として挙げており、月に150ディルハムとも100ディルハムとも言われる額を受けとることになる (W 129-130)。ちなみに5代カリフ・ラシード (在位170/786-193/809) の時代にクーフアのカーディーとなったハフス Ḥaṣṣ b. Ghiyāth (d. 194/810) が病で半月職務を休んだ際には総督より100ディルハムがリズクとして届けられている (B VIII 199)。⁽⁷⁾ミスルにあってはムファッダル al-Mufaḍḍal b. Faḍāla が3代カリフ・マフディー (在位158/775-169/785) の時代に月額30ディナールを受け取っていたとされる (K 377)。ラシードの時代、平均的な家族の年間支出が300ディルハムで足りたことを考えれば、かなりの収入があったことになる。⁽⁸⁾

ユースフにイブン・アビー・ライラーが依頼したのは、ハラス (護衛) をモスクまで同行させ、それを人々に見せることであったが、それは、親シーア派、反権威主義的な土地にあって自らの意志でウマイヤ朝の官職に就くのではない

ことを示す為であったと思われる。また彼は昼食後、マジュリスに向かい (W 134)、同時期ハラージュ地のカーディーに任命されたイブン・シュブルマ Ibn Shubruma と共に毎夜クーファ総督イーサーの館で過ごした (S 351) とされるように、アッバース朝にあっては政府と密接な関係を持って新王朝の政策に参画したと考えられる。⁽⁹⁾ 実務的なカーディーとして2つの王朝に仕えたイブン・アビー・ライラーと、カーディーへの就任を拒み、マンスールによって投獄されたアブー・ハニーファはほぼ同世代であり、2人は、ラーイ (個人的見解) を重視したことで知られるが (Q 494-495)、彼らの対立関係は、対照的な経歴に起因することが多いように思われる。イブン・アビー・ライラーは彼を侮辱した女性をモスクの中でむち打ったが、これに異議を唱えたアブー・ハニーファを彼は総督に訴え、ためにアブー・ハニーファは法見解を述べることを禁じられたと言われる (Kh II 584-585)。イブン・アビー・ライラーの死後、マンスールが次期のカーディーに任命したのはイブン・アビー・ライラーの甥の子であるアブド・アルラフマーン ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Abd Allāh であった。彼は間もなく死ぬが、その子バクル Bakr b. ‘Abd al-Raḥmān はマームーン (在位 198/813-218/833) の時代に10年ほどカーディーを務めている。この事実は単にイブン・アビー・ライラーの一族がアッバース朝に協力的であった事のみならず、彼の実務的な知識が一族のイーサー ‘Isā b. al-Mukhtār によってバクルに伝えられているように (S VI 406, A VIII 205)、一族内で代々世襲的に法学の知識が受け継がれていった事を示す。

イブン・アビー・ライラーの孫ムハンマド Muḥammad b. ‘Imrān が伝えているところでは、創造されたコーラン説を唱えたアブー・ハニーファをイブン・アビー・ライラーはマンスールに訴えたが、首を打ち、火あぶりにするというカリフの言葉にアブー・ハニーファはその説を撤回している (W III 142)。この逸話は、にわかに信じられるものではなく、おそらくムハンマドの活動時期がマームーン時代のムータジラ派神学の隆盛期にあたっていたことから来るものであると思われる。マームーン時代のカーディー、バクルについては残念ながら詳細な記録に乏しいが、イブン・アビー・ライラーの一族がアブー・ハニーファの人脈となおも対立関係にあった事、彼らが創造されたコーラン説という合理的な神学理論に与する事がなかったことを上の逸話は示すものとみてよいであろう。

アブド・アルラフマーンの死後、クーファのカーディーに強引に任命された

スフヤーン・アッサウリー Sufyān al-Thawrī (d. 161/777) はカーディーの任命書をティグリス川に投げ捨て、バスラに逃亡、潜伏することになる。マンスールに謁見中のスフヤーンの無礼な態度はカリフに「彼のような人間は、我々の手にかかって死ぬことしか考えていない」と言わせているが(Kh I 577-578)、アッバース朝権威に対するこのような姿勢は、スフヤーンに限らずアブー・ハニーファからクファのウラマーに共通のものであった。シャリーク Sharīk (d. 177/794) は法学者としてよりもハディース学者として有名な人物であったがマンスールはカーディー職就任要請を拒否する彼に対し、親族50人に危害を加えると脅迫している (S VI 379)。スフヤーンが自らの信条を行動で示した一方で、いきさつはどうあれカーディーを務めたシャリークは世間的にはディルハムを望んだとみなされることになる (Kh I 578)。

クファはアリー緑の地ということもあり伝統的に親シーア派のウラマーが多かったが、そのことは法理論の根拠をアリーに求めてきた歴史も関係するように思われる。⁽¹⁰⁾ シャリークはムアーウィヤをアリーの権利を奪った人物とみなす一方、アブー・バクル、ウマルをそしったと非難されている (W III 156, Kh I 662-663)。⁽¹¹⁾ また彼はラーフィダ Rāfiḍa 派やムルジヤ派の証言を認めず、ラーフィダ派の親族にザカートを与えることを禁じ、アリーに対するアブー・バクル、ウマルの優越を表明する人物をはりつけにするとまで述べているが (W III 161-162)、このことは彼がザイド派の見解を持っていたことを想起させる。シャリークはマフディーの時代を通じてカーディーを務めたが、マフディーのワジール、ヤークーブ Ya‘qūb b. Da‘ūd の親族はかつてザイド派を標榜し、ヤークーブ自身、⁽¹²⁾ 純粹の魂ムハンマドの弟イブラーヒームのバスラ蜂起に加わっている。マフディーについても彼は、⁽¹³⁾ ハサン家とイーサー ‘Īsā b. Zayd (ザイド派の中心人物ハサン Ḥasan b. Šāliḥ がクファにかくまっていた) について知るザイド派の法学者を法律顧問に迎えると明言している (T III 507-508)。マフディーの時代はワジール、ヤークーブの存在からも明らかであるが、シーア派に対して優遇政策がとられた時期であり、したがってシャリークのカーディーとしての裁決にはマフディーの政策が反映しているとも見ることができよう。

マフディーの治世の後期は、マニ教徒 (Zindīq) への迫害が強まった時期であり、マニ教徒の嫌疑をかけることは、政敵を失脚させる政治的な手段に利用された。⁽¹³⁾ シャリークは、娘の財産を相続したとしてマニ教徒と非難されているが、この事実は、当時の社会風潮を反映していると思われる (W III 162)。166

/782年になるとヤークーブは解任され、以前ワジールであったアブー・ウバイド・アッラーフ Abū ‘Ubayd Allāh の息子やバスラ総督ラウフ Rawḥ b. Ḥātim の息子がマニ教徒であると弾劾された (T III 517)。したがってこの時期は、マフディーの治世の末期にあって宮廷内権力抗争が激化した時期であり、これを主導したのがハーディー (在位169/785–170/786) 時代のワジール、ラビーウ al-Rabī‘ b. Yūnus であった。

アブー・ユースフ Abū Yūsuf (d.182/798) は当時、次期カリフ位継承者、ハーディーの後見となり彼のもとでカーディーを務めていたが (T III 517)、彼は同じアブー・ハニーファの弟子でアスカル・アルマフディーのカーディーであったアーフィヤ ‘Āfiya b. Yazīd al-Awdī と共に「シャリークはわれわれの書を実行しない、われわれの意見を考慮しない」とマフディーに訴えている (W III 159, 255)。アーフィヤと同時期バグダードのティグリス西岸シャルキーヤのカーディーを務めたサイード Sa‘īd b. ‘Abd al-Raḥmān は、人々がマニ教徒と非難する人物について「望む者は彼を殺すがいい」と述べるに到ったが、これに反対したのがシャリークであった (W III 174)。シャリークの解任には当時のマフディー時代の政争が背景にあったと考えられ、この後シャリークと対立したアブー・ユースフは、ハーディーを経てラシードの治世の初期には大法官カーディー・アルクダートとしてカーディーの任免、ひいてはアッバース朝の政策にまで大きな影響を及ぼすようになる。彼の著書「租税の書」Kitāb al-Kharāj については、彼以前に同様の著作を残したアブー・ウバイド・アッラーフが政争により失脚した後、権力抗争を乗り切ったアブー・ユースフが新たな政治原理を提示する必要があることも執筆の動機に挙げておかねばならない⁽¹⁵⁾。アブー・ユースフやアーフィヤがその後もシャリークと反目しあったことは、彼らふたりがシャリークをシーア派の別名であろう Faṭīmī であるとラシードの前で非難し、またラシードに接見中のシャリークにたいしてアブー・ユースフが論駁していることから分かる (W III 158–159)。シャリークの死は177/794年のことであるがその葬儀にはラシードも参列したほどクーフアでの彼の足跡は大きかった⁽¹⁶⁾。

シャリークを解任したのはカリフ、マフディーともハーディーとも言われ、はっきりしないが (S VI 379, Kha 447)、次のカーディー、カーシム al-Qāsim b. Ma‘n はアブー・ハニーファの弟子とされ (Y VI 200)、「彼のマジュリスより有益な場所に座る人はいなかった」とまで述べていることから分かるよう

に (W III 176) ハナフィー派の人脈においてアブー・ユースフとつながる。ほぼ同時期バグダードのアスカル・アルマフディーのカーディーを務めたアウン‘Awn b. ‘Abd Allāh は同じフザイル Hudhayl 族に属し3代前のマスウード Mas‘ūd を共通の祖先にもっている。カーシムにカーディー職就任要請をしたのはクーフア総督ムサー Mūsā b. ‘Īsā⁽¹⁷⁾ であり、就任をしるカーシムに対してムサーは75回むち打つと脅迫して彼に承諾させている (W III 177)。彼の位置する人脈の影響力の大きさと就任拒否の態度は彼の立場が複雑であったことを想起させるが、彼は死ぬまでリズクを得ることがなかったといわれ (Y VI 200), これはクーフアのウラマーとしての姿勢を示したものとといえよう。⁽¹⁸⁾ またカーシムは、弓で人を射ち殺した人物をどう裁くかでムサーの前でシャリークと論争している (W III 179)。カーシムの死後ラシードの時代に2年間カーディーを務めたヌーフ Nūh b. Darrāj (d. 182/798-799) はナハウ Nakha‘ 族のマウラーであり、ラーイの徒とされ、アブー・ハニーファから法学を学んだ (B XIII 315, 317)。彼をカーディーに任命したのはバルマク家のヤフヤーといわれている (W III 182)。次のハフスはナハウ族の出身であり、同じナハウ族のタルク Talq b. Ghannām (d. 211/826) を書記として用い (S VI 405), 訴訟を起こした人物の調査を担当させた (W III 188)。ハサン al-Ḥasan b. Ziyād al-Lu’lu’ī (d. 204/819-820) はナハウ族のマウラーであり、アブー・ユースフ、シャイバーニー Muḥammad b. al-Ḥasan al-Shaybānī (d. 189/804-805) と並ぶアブー・ハニーファの高弟であった (N I 506)。彼を任命したのはラシードとも (Kh 464) アミーンとも (W III 188) いわれており、法学をマームーンに⁽¹⁹⁾ 教授している。

ナハウ族については1世紀末にクーフアで活動した法学の権威イブラーヒム Ibrāhīm al-Nakha‘ī (d. 96/715) の存在にその人脈の起源をみる⁽²⁰⁾ ことができる。シャリークはナハウ族であり、アラブ至上主義とも言える立場を取ったが、ヌーフ、ハサンらマウラーのカーディーの存在は、アブー・ハニーファを⁽²¹⁾ はじめとしてシャイバーニー、クーフアのハディース学の大家アーマシュ A‘mash⁽²²⁾ (d. 148/765) ⁽²³⁾ らがマウラーであったことをあわせて考えると、血統そのものより、親族や師より受け継いだ知識、実際に裁判業務などを補助するなどして得た経験がクーフアのカーディーに求められていたことを示すものである。

シャーフイイーの法源論が受け入れられ、ブハーリー Bukhārī (d. 256/870) らのハディース集が編纂される以前のこの時期においてもカーディーを含む法

学者が法的な裁決を下したり、政府の政策を立案したりする際に、その判断の根拠をコーラン以外に預言者、サハーバ（教友）のハディースに求めようとするのは自然のことであり、この態度はアブー・ユースフの「租税の書」 Kitāb al-Kharāj にみることができる。また預言者のハディースについてはその真偽が議論されるがそのイスナードについては後世のハディース学者の吟味を経たものであり、そのつながりはかなりの程度ウラマーの学問傾向を反映していると言える。シャリーク、カーシム、ヌーフ、ハフスの各カーディーは、アーマシュ、ヒシャーム Hishām b. ‘Urwa (d. 146/763)⁽²⁴⁾、イスマーイール Ismā‘il b. Abi Khālid (d. 146/763)⁽²⁵⁾ といったウラマーからハディースを学んでいる点が共通し (A IV 293-294, VIII 304, X 430, II 358), アブー・ユースフについても彼はアブー・ハニーファから法学を学ぶ以前にアーマシュ、ヒシャームからハディースを学んでいる (Q 499)。アミーンがハサンを解任した後、カーディーに任命したのはアブー・ハニーファの孫、イスマーイール Ismā‘il b. Hammād である。彼は、カーシムのカーディー職務に関する逸話を多く残しており (W III 178-181), 彼のもとで裁判業務を補佐していたと推測される。ラシードの時代以降、バスラとバグダードのカーディーを務めたムハンマド Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Anṣārī (d. 215/830-831) はアブー・ユースフの弟子であるが (B V 409), 彼は「ウマルの時代よりこのかた、彼（イスマーイール）より知識のある人間がカーディーを務めたことはなかった」とまで述べている。彼はクーフアのアリー家の女性の葬儀に参列したことが伝えられている (W II 169-170)。

ヌーフ、ハフス、イスマーイールについては、それぞれがバグダードのカーディーも務めており、特にラシード時代以降は、クーフア、それもハナフィー派の法学を修めた人間がアッバース朝におけるイスラム法学を主導していたことが分かる。ちなみにラシードの時代の最初のバスラのカーディー、アブド・アルラフマーン ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad al-Makhzūmī はハナフィー派としては最初のカーディーであり (Kha 464), モスルにあっては166/782-783年よりカーディーを務めたアリー ‘Alī b. Mushir 以降、クーフア出身者がラシードの時代を通じてカーディー職を占めた。180/796-797年、ラシードのモスル遠征に同行したアブー・ユースフは、同じアンサーリーのアッバース al-‘Abbās b. al-Faḍl al-Anṣārī をカーディーに任命しようとしているが、アッバースに拒否されている (Az 248 ff)。アッバース朝の全盛期と言われるラー

ドの時代、その中でも特にバルマク家の時代における経済活動の繁栄ぶりは、商人の活動に理解を示したといわれるハナフィー派が彼らに対して柔軟な法解釈で臨んだことと無関係ではない。⁽²⁶⁾ またバルマク家が保護したシーア派、ムータジラ派の文人の存在は、ハナフィー派が他の法学派と比べた場合にリベラルな法理論を持つうえで影響を与えたと思われる。

III. メディナのカーディー職

メディナのカーディーについてみると、初代カリフ、アブー・バクルのバクル家、2代カリフ・ウマルのウマル家の人間が多くを占め、その他、マフズーム Makhzīm 家、ズフラ Zuhra 家など大部分はクライシュ族に属していた。クーファに比べて就任者が多く、再任されることがしばしばであったこと、またクーファやバスラと異なり、ハディース学などを修めたウラマーが少ないことは聖地であってカーディー職が有力家系の名誉職とみなされ、短期間で順次交代されていくならわしであったことを物語る。

最初のカーディーはクライシュ族のアブー・バクル Abū Bakr b. ‘Abd Allāh b. Abī Sabra al-‘Āmirī (d. 162/778–779) である。カーディー職を解任されてから後の個人的行動として、彼はメディナ総督リヤーフ Riyāḥ b. ‘Uthmān の命令によって徴収していたアサド族、タイイ族の20,000ディーナールのサダカを145/762年、純粹の魂ムハンマドが蜂起するや彼に与え、そのため70回むち打たれた後投獄されている。メディナの商人と黒人兵がメディナ総督アブド・アッラーフ ‘Abd Allāh b. al-Rabī‘ の軍隊と衝突した際にはクライシュ族の人々によって獄より開放され、説教壇の上からカリフへの忠誠を求めている (T III 265–266, W I 201–202, A XII 32)。次のカーディー、アブド・アルアジーズ ‘Abd al-‘Azīz b. al-Muṭṭalib al-Makhzūmī はワキーウによるとザイドの息子フサインと論争の上、彼をむち打つことを命じているが (W I 204) 純粹の魂ムハンマドの叛乱の際にはムハンマドによってメディナのカーディーに任命されている (T III 198)⁽²⁷⁾。アブド・アルアジーズはアブー・バクルと同じタイム家に属したタルハ Ṭalḥa b. ‘Ubayd Allāh の子孫にあたる女性に求婚したが、女性の父の承諾にもかかわらず、これに介入したのがバクル家のムハンマド・ブン・イムラーン Muḥammad b. ‘Imrān であった (W I 207)。このムハンマドのおじにあたるタルハ Ṭalḥa b. ‘Abd Allāh の一族はナジュドを拠点とし、アリー家の中でもハサン家、ジャーファル家とは、戦闘を交えお互い

に血の復讐を求める関係にあった (H 137)。彼らはアブー・バクルの息子 ‘Abd al-Raḥmān の子孫に当たるが、彼らの一族の人間をアブド・アルアジーズは投獄するなど (W I 207, 210)、両者の対立関係はアリー家が係わっている部分が大きい。またアブド・アルアジーズはクーファ総督で次期カリフ位継承者のイーサーの縁談をまとめている (W I 209⁽²⁸⁾)。

彼以後のカーディー在職者については情報が錯綜しており正確なリストの復元は困難であるが、彼のライバルであったバクル家のムハンマド・ブン・イムランがカーディーを務めたとされている (W I 210)。ズフラ家のムハンマド Muḥammad b. ‘Abd al-‘Azīz は純粹の魂ムハンマドの叛乱をはさんで2度カーディーを務めているが、乱後マンスールによってメディナ総督に任命されたアリー家のハサン Ḥasan b. Zayd によって投獄されている (W I 213)。バクル家、ウマル家とアリー家の対立は、アブー・バクル、ウマルがアリーの権利を奪うという罪を犯し、したがって彼らは非合法のカリフであるとする後の12イマーム派やザイド派の一部の主張を想起させる。

しかしながらジャーファル・アッサーディク Ja‘far al-Ṣādiq についてはシーア派のイマームのなかにあってメディナで政治的に穏健な態度を取り続けたことが知られている。ジャーファル・アッサーディクの母はその父、母ともアブー・バクルの孫であり、彼自身「アブー・バクルは2度私を誕生させた」「アブー・バクルの調停を模範としたい」と述べているようにバクル家との血縁関係からメディナの政府権力、ウマル家などの有力家系とも親密な関係にあったと思われる。彼は母方の祖父カーシム Qāsim をはじめとしてズフリー、タイム家のムハンマド Muḥammad b. al-Munkadir などメディナ系の学者とつながりが深い (A II 88–89)。

ハーディーからラシードの治世にかけてメディナのカーディーを務めたウマル家のアブド・アルラフマーン ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Abd Allāh al-‘Umārī, ヒシャーム Hishām b. ‘Abd Allāh al-Makhzūmī, アブー・バフタリー Abū Bakhtarī (d. 200/815–816) についてはハーディース学者ヒシャーム・ブン・ウルワから学んだ点がアブー・ユースフをはじめとするクーファ系の法学者、カーディーたちと共通する。アブド・アルラフマーンはバグダードに出てそこに居を構え、ハーディースを学んだとされる (B X 231)。ヒシャームはヒシャーム・ブン・ウルワの側近であり、マーリク・ブン・アナスの甥にあたる人物によってハッジをしたラシードに紹介されている (S V 422)。アブー・バフタリーは

クライシュ族はクサイイ家に属し、メディナからシリアに移り住んだ後、バグダードに赴いている。当時クーファ学派の影響下にあったアッバース朝の司法行政の中で彼らの任命にはこのようなクーファ学派との学問的つながり、バグダードとの関係が影響していると推測できる。しかしながらラシードの宮廷における勢力争いが激しくなるに従い、彼らがアブー・ユースフとは反対の立場を取るようになったことは確かである。176/792-793年ダイラムに蜂起したハサン家のヤフヤー Yaḥyā b. ‘Abd Allāh にアマーノ（生命の保証）を与えてバグダードに護送してきたのはバルマク家のファドルであったが、このヤフヤーをめぐる取扱いであくまでもアマーノの合法性を主張したのがアブー・ユースフの弟子 ṣāhib Abū Yūsuf と形容されているシャイバーニーである (T III 619)。反対にアマーノの無効を訴えたのがアブー・バフタリーであり、ラシードは彼の主張を採用し、ヤフヤーを獄死に追い込むことになる。ここにはアブド・アルラフマーンやバクル家のムハンマド・ブン・イムラーンの息子アフド・アッラーフらメディナの人間も立ち会っており (W III 249)、アブー・バフタリーと同じ見解を示したと思われる。この事件がバルマク家の没落の一因ともされているように、これは単に法学上の見解の相違ではない。⁽²⁹⁾ 筆者はかつてバルマク家とアブー・ユースフ、そして軍人のハルサマ Harthama b. A‘yan がホラーサーニーの子孫であるアブナーと対抗していく上で政治的なブロックを組んでいたと指摘したが、この事件はシーア派擁護をめぐるバルマク家とアブナーの対立抗争がカーディーの間にも及んだことを示している。⁽³¹⁾ アブー・バフタリーについては182/798年のアブー・ユースフ死後カーディー・アルクダートに任命されたという記述もあるが (Kh VIII 187, Kha IV 284)、これはおそらく正式なものではなく、確かなことはアスカル・アルマフディーのカーディーとしてラシードのもと大きな権限をふるったことであり (S VII 332)、これによってバルマク家の政治的敗北が決定的になったということができよう。彼は190/805-806年のラシードの東ローマ遠征に同行し、キプロスからもたらされた16,000人の捕虜がラッカに連行されて奴隷として売られた際にはこの売買を監督している (T III 709)。彼はその後192/808年、礼拝、軍事の権限を合わせ持つアッバース朝のメディナ総督を兼任するカーディーとしてメディナに赴き、そこでアリー家を弾圧し、ジャーファル Ja‘far b. ‘Ubayd Allāh を投獄している (‘I 365)。

この時期にクーファ閥とメディナ閥の争いが地方にも波及した点は見逃せな

⁽³²⁾

い。ミスルはもともとメディナ学派の影響力の強い地域であり、⁽³³⁾ ラシード治世の最初のカーディーはメディナ学派でアブー・ユースフと同じアンサーリーの‘Abd al-Malik b. Muḥammad al-Anṣārī であった (K 383)。174/790年ミスル総督によって地元のカーディーが再任された後 (ラシードの認可の書が届いている), 177/793年にはクーフア出身のムハンマド Muḥammad b. Masrūq al-Kindī が着任している。ミスルでは総督のマジュリスにカーディーが出席することは慣例となっていたが、ムハンマドはそれを拒否し、また外来のカーディーとしてミスルの住民とはことごとく対立した。ミスルの孤児の財産やワクフ財は公庫に入っていたが、彼はそれをラシードのもとへ運ぼうとしていると非難されている (K 390–391)。ムハンマドのミスルのカーディー就任は当時全盛期にあったバルマク家やアブー・ユースフの影響によるものであり、彼がキリスト教徒をモスクに入れた最初の人物とされているのは当時のバグダードの学問的風潮が反映されたものである。ミスルのマワーリーの訴えによって彼を解任したのはアブー・バフタリーであり、これは 184/800–801 年のことであった。ムハンマドはアブー・バフタリーが任命した後任者の赴任以前にミスルを去り、代理としてイスマーク Ishāq b. al-Furāt を任命した。彼はミスルでカーディー職についた最初のマワーリーであり、マーリク・ブン・アナスの弟子であったがアブー・ユースフに会い彼から教えを受けたという経歴を持つ (K 393)。彼の後にカーディーとなったのはアブー・バフタリーの盟友、アブド・アルラフマーンであるが、次のカーディー、ハーシム Hāshim b. Abī Bakr alBakrī はクーフア出身でハナフィー派に属し、アブド・アルラフマーンを投獄している (K 412)。ハーシムの書記を務めたのはやはりクーフアの人々であった (K 415)。

バルマク家の出身地バルフにあってハナフィー派に属するカーディー、法学者たちをアブナーを代表するホラーサーン総督アリー ‘Alī b. ‘Isā が処罰、追放するなどバグダードの政争はバルマク家よりのクーフア閥とアブナーよりのメディナ閥の対立という形で顕在化していたといえる。⁽³⁴⁾

マームーンがアミーンとの内乱後もホラーサーンにとどまっていた時期、ターヒル Ṭāhir b. Ḥusayn がカーディーに任命したのは総督のダウード Da’ūd b. ‘Isā であったが、199/815年クーフアに蜂起したアブー・アッサラヤー Abū al-Sarāyā がメディナに派遣したアリー家のムハンマド Muḥammad b. Sulaymān はメディナにおいては初めてのアンサーリーであるムハンマド Muḥam-

mad- b. Zayd を任命している。叛乱を鎮圧したアブナーの指揮官ジャーロード al-Jārūd はウマル家のアブド・アルラフマーンを再度メディナのカーディーに任命しているが、バルマク家のムーサー Mūsā b. Yaḥyā がカーディーに任命したアブド・アルジャッパール ‘Abd al-Jabbār b. Sa‘īd al-Musāḥiqī はアブド・アルラフマーンを投獄している (W I 256)。この間の経緯はマームーン配下の複雑な権力抗争を示すが、マームーンが踏襲したバルマク家の路線は彼の時代にアンサーリーの人間がメディナのカーディーに相次いで任命されていること、彼の時代の末期にハナフィー派のアフマド Aḥmad b. Ya‘qūb al-Anṣārī が就任していることにも表れているといえる (W I 257-260)。

IV. おわりに

アッバース朝におけるクーフアとメディナのカーディーはその出身、人脈、学問傾向、政治的な役割において、互いに異なっていた。クーフアではかつての法学の権威イブラーヒーム・ナハイーの伝統を受け継いだナハウ族、反権威的、親シーア派的な土地柄にあって政府に協力的な姿勢の目立ったイブン・アビー・ライラーの親族や、アブー・ハニーファの門弟がカーディー職のほとんどを占めた。カーディーの任免にはバグダードの政治的な抗争が背後にあったが、アブー・ユースフがカーディー・アルクダートに就任して後は、バルマク家、マームーンの時代を通じてハナフィー派の法学者、カーディーと政府の接近が顕著になった。また当時のイラクにおけるリベラルな学問的風潮はクーフアのカーディーの裁決や法学者の法見解に反映されていたと思われ、これらの点からハナフィー派法学理論の形成過程を見ていくことも必要であろう。

メディナにおいてはクーフアのザイド派、ラーフィダ派が非難の対象としたアブー・バクル、ウマルの子孫であるバクル家、ウマル家の人間の多くが、メディナのカーディー職の多くを占め、特にラシード時代以降はクーフア学派との対立が表面化することが多くなった。ハディース学、法学にたずさわったウラマー出身のカーディーはむしろクーフアに多く見られ、メディナのカーディーはその学問よりも有力家系に属するという権威で、聖地の司法行政をとりしきったといえる。メディナ学派の法理論は中央政府の政治的影響から離れたところで学問的に発展した面が多く、この点でもクーフア学派とは対照をなしているといえるであろう。

注

- (1) L. Massignon, “Cadis et Naqıbs Baghdadiens”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, Vol. VI, 1948, pp. 106–115.
- (2) Ch. Pellat, *Le Milieu Baṣrien et la Formation de Jāhiḡ*, Paris, 1953, pp. 284–291.
- (3) D. Sourdel, “Les Cadis de Baṣra d’après Wakı”, *Arabica*, Vol. II, 1955, pp. 111–114.
- (4) G. H. A. Juynboll, *Muslim Tradition*, Cambridge, 1983, pp. 77–95.
- (5) J. Schaht が123/741年にイーサーによって任命されたとするのは2つを混同している (*Encyclopaedia of Islam* [New Edition], vol. III, p. 687, s. v. Ibn Abı Laylā).
- (6) カーディーの任命形態については E. Tyan, *Histoire de l’Organisation Judiciaire en Pays d’Islam*, Leiden, 1960, pp. 124–126; J. Schacht, *An Introduction to Islamic Law*, Oxford, 1964, pp. 50–51 参照。
- (7) この時ハフスは、ムスリムのために働いていないことを理由に受け取りを拒んでいる。
- (8) S. Sabari, *Mouvements Populaires à Bagdad à l’Époque ‘Abbasside IX^e–XI^e Siècles*, Paris, 1981, p. 40. 革命時カリフ、サッファーフは兵士のリズクを月額80ディルハムに上げ (T III 41), マームーン時代には、騎兵で40ディルハム、歩兵で20ディルハムという記録もある (T III 1008)。
- (9) アッバース朝時代の政府とウラマー、カーディーの関係については嶋田襄平著『イスラム教史』, 世界宗教史叢書5, 山川出版社, 1978年, 162–163頁。
- (10) Schaht, *op. cit.*, pp. 33–34. イラクの初期法学派が権威とした Ibrāhīm al-Nakha‘ī は初代シーア派イマーム ‘Alı や Ibn Mas‘ūd を権威としていた (J. Schacht, *The Origins of Muhammadan Jurisprudence*, Oxford, 1950, p. 31)。
- (11) ザイド派とともに当時のシーア派を構成したセクト。名の由来については, W. M. Watt, “The Rāfiḡite: A Preliminary Study”, *Oriens*, Vol. XVI, 1963, p. 116; E. Kohlberg, “The Term “Rāfiḡa” in Imāmı Shı‘ı Usage”, *Journal of the American Oriental Society*, Vol. XCIX, No. 4, 1979, pp. 677–678 参照。
- (12) ヤークーブの経歴については, D. Sourdel, *Le Vizirat ‘Abbāsıde de 749 à 936*, Damas, 1959, I, pp. 103–108 参照。イブラーヒームのバスラ蜂起にはザイド派が荷担していた (T III 316)。
- (13) この時期のマニ教徒迫害の政治的意味については, F. Omar, “Some Observations on the Reign of the ‘Abbāsıd Caliph al-Mahdı 158/775–169/785”, *Arabica*, Vol. XXI, 1974, pp. 142–143 参照。
- (14) 151/768年マフディーがホラーサーンから帰還した年に軍勢の宿营地としてマンスールが着工した。後, ルサーファ地区となる (G. le Strange, *Baghdad during the Abbasid Caliphate*, New York, 1972, p. 42)。
- (15) A. Ben Shemesh は, ウバイド・アッラーフがユダヤ教徒の改宗者で, 彼の著作が宗教的見地からみて認められなかったことが彼の著述後ほどなくしてアブー・ユースフに新たな著作が求められた一因であると言う (*Abū Yūsuf’s Kūtāb al-Kharāj, Taxation in Islam*, Vol. III, Leiden, London, 1969, pp. 11–12)。

- (16) マンスールによってカリフ位継承権を放棄させられた前クーファ総督のイーサー ‘Īsā b. Mūsā が167/784年に死んだ際、ラウフはカーディー（おそらくシャリークであろう）やクーファの有力者を立ち会わせている。ラウフはイーサーの一族に対して示した敬意についてマフディーの怒りをかっている（T III 519）。
- (17) ワキーウ（W III 177）に ‘Īsā b. Mūsā とあるのは誤りであろう。ムーサーはマフディーの治世で最後のクーファ総督であり（Kh 441）、マフディーが死にハーディーがカリフ位についた 169/785 年以降総督職にあったことが確かめられる（T III 568）。おそらくムーサーの総督就任は父イーサーの葬儀でクーファ総督のラウフがカリフの怒りをかった 167/783 年直後のことであろう。シャリークの解任時期についての史料の混乱はこのあたりにも関係があるであろう。
- (18) カーシムのおじカーシム al-Qāsim b. ‘Abd al-Rahmān もウマル 2 世のもとでクーファのカーディーを務め、リズクを取らなかったとされる（W III 7）。
- (19) *Encyclopaedia of Islam (New Edition)*, Vol. VI, p. 331, s. v. Ma’mūn.
- (20) 彼はブハーラーの生れであり（S VI 378）、クーファのナハウ族の人脈とは外れた位置にあったと言えるかもしれない。彼はマフディーの前で「私は弓の中心にあたるアラブの男である」と述べている（W III 156）。彼の祖父はカーディシーヤの戦いに参加した（S VI 378）。また彼はクーファでカリフからもたらされた財を市民に分配する際、アラブ 12、マワーリー 8、（あるいはアラブ 8、マワーリー 4、ナバタイ人 0）の割合で分配し、このためマワーリー、アジャムの怒りをかっている（W III 158-159）。
- (21) ちなみにミスルでマワーリーが最初にカーディーとなったのは 184/800-801 年、クーファ出身のカーディー、ムハンマド Muḥammad b. Masrūq al-Kindī の代理となったイスハーク Ishāq b. al-Furāt である。彼はシャーフイーの賞賛を受けている（K 393）。
- (22) 彼はラシードによってラッカのカーディーに任命され、後ラシードのホラーサーン遠征に従い、ライで死んでいる（Q 500）。
- (23) 父はフサイン Ḥusayn b. ‘Alī の殉教の場におり、アーマシュはその日に生れたと言う（Q 489-490）。
- (24) 父がメディナの有名な法学者であり、マンスールの時代にクーファに出て、クーファの人々にハディースを伝えた（Q 222-223）。
- (25) バジーラ族のマウラーで Ibrāhīm al-Nakha‘ī と同世代。クーファに没（Q 480）。
- (26) E. Ashtor, *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages*, Los Angeles, 1976, pp. 110-111.
- (27) フサインについては 135/752-753, 140/757-758 に死亡したという記事がある一方（‘I 291）、純粋の魂ムハンマドの叛乱に加わったともいわれ（Is 278, 389）、ワキーウの記事の真偽は定かでない。
- (28) イーサーが望んだ女は次女であったが、長女より先に嫁には行かせないという父に対し、アブド・アルアージュズは一時的に長女に求婚して承諾させた。
- (29) Sourdel, *Le Vizirat*, pp. 158-166.
- (30) 拙稿「アッバース朝の東方経営とラーフィー・ブン・ライスの叛乱」、『アジア史

研究』第11号，1987年，63頁。

- (31) この時，バルマク家の Yaḥyā b. Khālid は，バグダードで人々をそそのかし，アリー家のヤフヤーへのバイアに人々を導いた，あるいは出身地バルフにカリフへの反抗を促す手紙を送ったと，ラシードに非難されている (W I 249, BI 149)。
- (32) クーファのカーディー，ハサンはクーファにやって来たメディナのウラマー，アブド・アルラフマーン ‘Abd al-Raḥmān b. Abī al-Zanād に預言者，教友から伝わるハディースをたずね，そのいくつかに矛盾があることを指摘するが，アブド・アルラフマーンは「その矛盾を知るために採用できるものも採用できないものも伝承する」と答えている (W III 188)。イラクからメディナにもどったアブー・バフタリーはイラクの住民のことについてたずねられ，「私はイラクの住民をもちあげたが，彼らは私を見下した」と答えている (W I 252)。
- (33) Schacht, *An Introduction*, p. 28.
- (34) 注30参照。

図版1 クーファのカーディー職

カリフ 1)	カーディー	出自	学派	職歴 2)	伝記史料 3)					
					S	Q	B	Y	Kh	A
サッファーフ	(1) Ibn Abī Laylā	Anṣār			○	○			○	○
マンスール	(2) ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Abd Allāh	Anṣār								
	(3) Sharīk b. ‘Abd Allāh	Nakha‘			○	○	○		○	○
ハーディー	(4) al-Qāsim b. Ma‘n	Hudhayl	Ḥanafī		○			○		○
ラシード	(5) Nūḥ b. Darrāj	Mawlā Nakha‘	Ḥanafī	バグダード			○			○
	(6) Ḥafṣ b. Ghiyāth	Nakha‘		バグダード	○	○	○			○
アミーン	(7) al-Ḥasan b. Ziyād al-Lu‘lu‘ī	Mawlā Nakha‘	Ḥanafī				○			
マームーン	(8) ‘Aṣim b. ‘Āmir	Bajīla								
	(9) Ismā‘il b. Ḥammād	Mawlā Bakr b. Wā‘ir	Ḥanafī	バスラ・バグダード			○			○
	(10) Bakr b. ‘Abd al-Raḥmān	Anṣār			○					○

図版2 メディナのカーディー職

カ リ フ	カ ー デ ィ ー	出 自	学 派	職 歴	伝 記 史 料					
					S	Q	B	Y	Kh	A
サ ッ フ ェ ー フ	(1) Abū Bakr b. Abī Sabra	‘Āmir (Quraysh)								○
マ ン ス ー ル	(2) ‘Abd al-‘Azīz b. al-Muṭṭalib	Makhuzūmī								○
	(3) Muḥammad b. ‘Imrān	Bakr								
	(4) Abū Bakr b. ‘Umar	‘Umar								
	(5) Muḥammad b. ‘Abd al-‘Azīz	Zuhra					○			
	(6) ‘Abd Allāh b. Ziyād	Mawlā Quraysh					○			
	(5) (2) (5)									
	(7) ‘Abd Allāh b. ‘Abd al-Raḥmān	Bakr			○					
	(3)									
	(8) Ishāq b. Ṭalḥa									
	(9) ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad	Makhzūm								
	(10) Muḥammad b. ‘Abd Allāh	Kinda		メディナ (総督, シュルタ)						
	(11) ‘Ubayd Allāh b. Abī Salama	‘Umar								
マ フ デ ィ ー	(2)									
	(12) ‘Uthmān b. Ṭalḥa	Bakr								
	(13) ‘Abd Allāh b. Muḥammad	Bakr		メッカ	○					

[illegible]

1) カーディー職就任時のカリフを示す。 2) 地名はそのカーディー職を務めたことを示す。 3) 独立して記載のある史料を示す。